

## 茜色の歌姫



## 第五部 法隆寺炎上



法隆寺（奈良県斑鳩町）

是の冬に、（中略）斑鳩寺に災けり。（中略）一屋も余ること無し。大雨ふり雷震る。

（『日本書紀』卷第二十八）

天皇、臥病したまひて、痛みたまふこと甚し。ここに、蘇我臣安麻呂を遣して、東宮を召して大殿に引き入る。（中略）天皇、東宮に勅して鴻業を授く。乃辞讓びて曰はく、「（中略）願

はくは、陛下、天下を挙げて皇后に附せたまへ。仍、大友皇子を立てて、儲君としたまへ。臣は、今日出家して、陛下の為に、功德を修はむ」とまうしたまふ。天皇、聴したまふ。即日そのひに出家して法服のりのころもをきたまふ。(中略) 或の曰あるひといは(い)はく、「虎に翼を着けて放てり」といふ。

『日本書紀』卷第二十八)

## 第一章 人妻ゆえに

668

飛鳥の北、広大な湖のほとりに新たに都が建てられて一年がたつていた。安曇の漁人の小舟の行き交うその湖は淡海と呼ばれる。その名にちなみ、新たな都は近江京と名付けられ、急ごしらえの宮や官衙かんがが、生木の匂いも濃く、屋を連ねていた。

——今日の御狩りは、近江に都を遷されてより、一年の祝賀。

淡海の東のほとり、広大な蒲生の野には、周囲にしめ縄が張りめぐされ、数百の兵が守る中、王族百官まへつぎみは、半ば強いられて美々しく着飾り、男どもは勢子の追いたてる獣に矢を射かけ、女どもは楽器をかきならし、うらかな春の野のにぎやかさを盛り上げていた。

朝より始まった御狩は、多くの獲物を仕留め、膳部の伴部どもが皮を剥ぎ、塩をかけ、火で炙って昼餉に供していた。

天蓋のついた椅子に座しているのは、天皇。かつては中大兄皇子との御名にて、大王と呼ばれる御位に即いてより、その呼称を天皇と改めた。齢四十八。このころは病がちで、目尻が黒ずみ、頬はこけていたが、久方ぶりの御狩に、朗らかな様子。

その隣に坐すは倭媛皇后。齢二十四。逆賊として討たれた古人皇子の娘、木幡のことである。ふっくらとした白い頬に、優しい眼差し。

その周囲を大官どもが集い、笑いさざめいて語り合うを聞けば、百済の言葉が飛び交っている。

蘇我赤兄、巨勢比等、紀大人、そして中臣金。白村江での敗軍の後に渡りきたり、大官に取り立てられた百済人に媚びるように、おぼつかない百済言葉を使う彼等こそ、今の近江京にあって、政事の中樞を司るとされていたが、その実、天皇がもつとも信を措き、その献ずる策の多くが採られているのは、朝議でも宴でも、目立たず黙するばかりの老人であることを、彼等がいちばんよく知っていた。

五十四歳になる中臣鎌子は、その齢より十は老いて見えた。髪は白く、皺は深く、面差しはくすみ、骨張った掌には黒い染みが浮いている。

この日も、そうそうに、「疲れた故」と天皇の御前を離れ、独り木陰に坐し、眠っているのか、静かに瞼を閉じている。

その傍らに、重たげな人影が立った。肥った貌を酒で赤く染め、足下も危なげに、息を切らせているのは中臣金。鎌子の従弟に当たる。

「金か」

鎌子は瞼を薄く上げ、呟いた。

「如何した」

「見たか」

金は膝を突き、耳元に厚い唇を寄せて囁いた。

「額田郎女が、彼方の紅葉の木陰で、大海人皇子と何か眼配せしあっていたのを」

「額田郎女が？」

「然り、然り」

金は大仰に頷いた。

「吾は見た。共に、舍人も女婦も伴わず、ただ二人、人垣より離れて」

「皇子と郎女は、かつては、夫と妃であった」

鎌子は瞼を閉じた。

「宴の場で語らうても、不思議はない」

「されど……」

金はなおも言い募ろうとして、鎌子の鼻孔から、かすかな寝息が響いてくるのを耳にし、舌打ちして腰を上げ、草を踏みしめる杳音も荒らかに去った。

鎌子は項垂れたまま、暖かな日差しを浴び、枯れ木のような四肢を締め、寝息を立てつづけた。

鎌子は、分かっている。

中臣金は、やがては世の乱れともなりかねない兆しを、あざとく見てとった己を、蔑ろにするかのような鎌子の態に、憤慨しつつ野を歩いた。

静まっているかのように見えるが、乱の種は尽きない。その一つが、まさに大海人皇子。かつて宝大王の側近くあり、今は歌を専らにして政事に携わってはいないが、大友皇子の妃なる十市皇女の母として重きをなす額田郎女。もし、この二



淡海（琵琶湖）

人が手を組めば……。

さらに、鎌子は大事なことを忘れていたのではないか。葛城皇子と鏡郎女が宝大王を弑殺したのを眼にした讚良皇女は、未だ行方が知れない。だが三年前、近江に百済人を移すため、阿倍比羅夫が三千の軍を率いて大津に陣した折り、これに抗う小豪族どもが大海人皇子を擁し、四千の兵とともに瀬田川を挟んで対峙したことがある。大海人皇子の陣中に、甲冑をまとった若い女の姿を、幾人かの兵が眼にしている。あれは、讚良皇女ではなかったか、との声もあった。

あの時……。そう、はや七年も昔。

夜中、朝倉宮に近く、仮の菅屋に起居していた中臣金を、鏡郎女が訪なった。

……葛城皇子は、意を決したもうた。

郎女は、息を潜めて言った。

……宝大王の意は、唐と談合し、三韓に兵は出さぬことは明らか。

射すくめられたように、鏡郎女の言に聞き入っていた中臣金は、問うた。

……それは、確かか？

……汝、三韓の鉄を欲するならば、吾等に随い、何が起ころうとも、吾等の言うがままにせよ。

……言うがまま、とは？

金は、額に汗を浮かべて問うた。

……何が起ころのか？

……何も問うな。誰にも漏らすな。

そう言ったきり、鏡郎女は去った。

そしてあの夜。朝倉宮に詰めていた舎人に呼ばれ、急ぎ駆けつけてみれば、宝大王は息絶え、その傍らに葛城皇子と鏡郎女がいた。蘇我赤兄、巨勢比等、紀大人とともに、中臣金は、鏡郎女が大王の衣をめくり、糸で縫って血留めをしたばかりの深々とした傷を露わにするのを眼のあたりにした。

……大王はしたもうた。これより、葛城皇子が称制したまう。臣等よ、よろしく随うべし。

蘇我赤兄が、巨勢比等が、紀大人が、次々と膝を突いた。彼等の面差しに何の揺らぎもない。あらかじめ、宝大王がこの夜に弑されることを、知っていたかのようにであった。中臣金も、彼等に随った。

その様を、書庫の隙間より眼にした讚良皇女に見られていたことを、後に金は知った。

三韓出兵が無惨な敗北に終わった後、従兄の鎌子と、その妻である安見娘の、葛城皇子を弑殺し、鏡郎女を誅し、百済の豊璋王子を大王に祭り上げようとの謀に、金をはじめ蘇我や巨勢、紀が賛し、共に動いたのは、葛城皇子や鏡郎女によって、何時の間にか大王弑殺の一端を担わされたという負い目を払うためでもあった。

そして、葛城皇子と鏡郎女は消えた。金ら四人の大官が大王弑殺に荷担したことを知っている者がいるとすれば、讚良皇女。あるいはすでに、讚良皇女の口より、大海人皇子に漏らされたかも知れない。

大海人皇子は、何も語らない。讚良についても、宝大王の崩御についても。

いまだ、かつて百済人だった豊璋王子が、天皇として国を統べる事に怒りを隠し切れぬ輩も

少なくない。それでも、世が鎮まっているのは、天皇の政事の鮮やかさによる。

近江に都が開けてより、御狩や宴が頻りに開かれた。瀬田や宇治には、百濟より来たった技人らにより、巨きな橋が架けられつつある。民は、眼に映るものの華やかさに随う。かつて、宝大王の興事が「狂心の渠」と難ぜられても、出来上がってしまえば、その壮麗さ故に崇められたように。

だが、このところ病に臥せることも多い天皇に何かあれば……。その御位を継ぐ者を、天皇は定めていない。大友皇子を、との声が高かったが、大海人皇子を推す中小の豪族どもの声も鎮まっていない。

もし、七年間の朝倉宮での出来事を、天下に広められれば……。

そこまで考えを巡らせた時、背後より声がした。

「楽しき御狩に、何を悩むぞ」

見れば、野を窪めて裂くように流れる小川のせせらぎに足を浸した安見娘であった。女孺のように装い、伴は随れず、髪に摘んだばかりの紫草を挿している。

すでに齢四十を越えたというのに、女童のような……。

金は足を止め、小川のほとりに降り立ち、従兄の妻に軽く拝礼し、周囲を伺った。丈の高い草が、金や安見娘の姿を、野に遊ぶ人々の眼から遮っている。

「大海人皇子が、額田郎女となにやら眼配せをしていた」

そう告げると、小川で足を洗っていたらしい安見娘は、けらけらと笑いながら、手にした沓に付着した草や土を払いつつ、問うた。

「そのこと、汝は如何見た」

「乱の兆しである」

「乱の兆し？」

「然り」

中臣金は、今まで脳裡で巡らせていた考えを、安見娘に訴えた。

「されど、汝が夫なる鎌子は、何も応えず、午睡を貪るばかり。はや、老いたか」

「吾が夫への悪口を、吾が前で言うか」

安見娘は笑い、金の軽忽を咎めた。金は流石に口を噤んだ。

「穏やかな日よな」

青く澄み渡った空を見上げ、安見娘は呟いた。

「されど、穏やかな日々とは、つまらぬものでもあるな」

「つまらぬ？」

「然り」

安見娘は薄く笑って金を一瞥した。

「つまらぬ日々には、波風を立てたいのである、汝は」

「……吾は、ただ」

「乱を希むは、吾も同じぞ」

沓をほとりに脱ぎ、せせらぎに足を浸したまま、腰を屈めて安見娘は川面を見つめた。

「鏡郎女は、かつて宝大王の側近く侍り、政事を動かした。しかるに吾は、大極殿への出入りす

ら、ままならぬ」

百済人の多くが要職を占める新たな王宮では、唐や三韓の風が急速に取り入れられた。大極殿での政事に携わるのは男のみと定められ、皇后をはじめ妃どもや彼女等に仕える女嬪には、別に内裏の奥に寝殿を建て住まわされた。天皇をのぞき、男が寝殿に出入りする事も禁じられた。

安見娘は、いまだ数十の土蜘蛛を差配しているとはいえ、表だって朝議に侍る事もなく、ただ、夫たる中臣鎌子に命ぜられるままに、土蜘蛛どもを動かすしかない。この日の御狩にも、幾人かの土蜘蛛が女嬪の装りで混じっていた。天皇の身辺を護るためである。土蜘蛛はもはや、そのような務めしか与えられていない。

「また乱が起これば、土蜘蛛どもの使いようもある」

そう言つて笑う安見娘の傍らに、中臣金が並んで坐した。

「では……」

凝つと、安見娘を見つめた。

「吾と、謀を共にせぬか」

「謀とな？」

「然り」

「如何なる謀ぞ？」

「それを、これから練る」

金は、安見娘の手を掴んだ。安見娘は抗いもせず、笑みを浮かべたまま、金を見つめ返した。「鎌子も老いた。もはや、平穩の裡に老いを養うのみが希みであろう。蘇我や巨勢もまた然り、

手に入れた榮えを保てば、心満たされる態。吾は違ふ。汝が吾に助力してくれば、何事かをなしえるはず」

「なるほどの……」

安見娘は、手を掴まれたまま、立ち上がった。

「汝が、何か乱を起こしてくれば、吾も面白く過ごせようぞ」

「さらば……」

同じく立ち上がり、身を寄せてくる金は、不意に貌を強張らせ、腰を屈めた。安見娘の膝が、彼の股間に打ち込まれていた。

膝を地に突き、横倒しに倒れ、せせらぎに半身を沈めた金に、安見娘は呼ばわった。

「誰ぞ、来よ！ 中臣金が酒に酔い、川に落ちた」

金は、起きあがろうと水飛沫を上げてもがくが、あまりの激痛に痙攣するばかりであった。安見娘は声を低めて言った。

「今の汝は、吾と謀を共にするに値せず」

金はようやく貌を上げ、恨めしげに安見娘を見た。その眼から涙が溢れ出ている。安見娘は優しげな笑みとともに続けた。

「いずれ、値する日も来ようぞ、励め」

御狩の宴は続いていた。

小高く盛り上がった丘の上、咲き誇る紫草の香りに包まれ、額田郎女は、このごろやや重たげ

になった尻を地に据えて坐していた。膝に、平たい石盤を載せ、蠟石で文字を書いては消している。

その傍らに、十を二つ三つ越えたばかりの男童が、難しげな貌で、地面に石盤を置き、両肘をついて腹ばいに臥せ、考え込んでいる。

「郎女の君よ」

不意に男童は首をひねって郎女を見上げて言った。

「いま一度、かの歌、誦したまえ」

「諾」

郎女は、歌った。

あかねさす

むらさきのゆき

しめのゆき

のもりはみずや

きみがそでふる

茜さす紫野行き標野行き、は、今まさに、茜色の日に照らされ、紫草の生い茂る野を、人々が逍遙している様。中には、恋うる女に袖を振る男もいる。女は応える。野を守る兵が見ている、と。野守は見ずや、君が袖振る。

「あかねさすは茜草指で如何」

男童は石盤の文字を指した。

「たしかに、指でさす。うまく当てたな」

深く頷く郎女に、男童は笑みもせず、再び石盤に眼を移した。

この頃、大和の言葉を音のまま表す文字はない。かつて漢より伝わってきた文字を代わりに用いていた。漢字を使えば、意味は通じる。しかし、大和言葉の音を表し、後の世に伝えることは出来ない。

政事の場合より遠ざかって数年になる。額田郎女は、諸国の歌を集め、文字にして残すことを専らにしていた。

「むらさきのゆき、は武良前野逝」

「ゆきは、行のほうか、ふさわしくはないか？」

「では、行。しめのゆき、は標野行」

茜草指

武良前野行

標野行

「巧みな文字の用いようかな」

郎女は感嘆した。五七五の調子を、漢字をそれぞれ三、五、三使うことで表している。

「ざれど……」

男童は髪をかきむしった。

「のもりはみずや……のもり、は野守……その後が浮かばぬ」

「しばし休め」

郎女は、竹筒を差し出した。男童は喉の渴きを思い出したように、竹筒に唇をつけ、一気に呑み、再び石盤に貌を埋めるように、書いては消し、書いては消しを繰り返した。

「人麻呂は、歌となると、傍らの事も見えなくなるな」

微笑を浮かべ、郎女は己の石盤に向かった。

今日の御狩の様を歌に作り、天皇に献ずるのが、郎女の役目であった。題は「相聞」。恋する男女のやりとり。女の側の歌は成った。男が応える歌を練らねばならぬ。

……紫の匂える妹を、までは浮かんだ。恥じらいを含んだ女のからかいを、どう返して己が意を、女の心に強く刻み込むか。郎女は眼を閉じた。

紫草が茂る野に立つ女。袖を振る男は、独りではない。周りに男どもが二、三、相聞の行方を笑みを含んで見つめている。男と女は……交わりのない仲ではない。否、情を交わした時もあった。野を守る兵に見詰められつつ、男はあえて、かつて睦みあった女に袖を振って、今も変わらぬ恋を訴える……。

そこまで思いをめぐらし、ふと、さきほど紅葉の下で大海人皇子と交わした眼差しが蘇った。

胸が重く塞がれた。

偶々、皇子と二人きりになった郎女は、懐かしさのあまり、思わず面差しが僅かに崩れた。四

年前、郎女はこの言葉を最後に、皇子から離れた。

……皇子は、何もしない。

……皇子が、吾のために、戦うことがあるか。

世も収まり、かつての豊璋王子、今上天皇とは、寝屋を共にしていない。再び、大海人皇子と睦みあうことはかなわぬのか。笑みを浮かべつつ、眼差しで訴えた。

だが、皇子は、眼を臥せるばかりであった。

もはや、かつてのようには……。

「ここにおわしたか」

野太い声が響いた。貌を上げて身を後ろに振ると、大友皇子が立っていた。

石盤を膝から下ろし、郎女は拝礼した。人麻呂と呼ばれた男童は、眼の前に立つ皇子が何者か分からず、両肘を地につけて腹這ったまま、呆けた貌で見上げていた。

「人麻呂！」

郎女の叱責に、人麻呂は慌てて起き上がった。

「構わぬ」

大友皇子は、闊達に言い、人麻呂の傍らに座った。

「汝も座れ。礼は要らぬ」

そして、郎女の方に眼を向けた。

「大和歌を作っておわすのか」



大友皇子は、ことさら「やまとうた」と言った。

百濟から逃れ来たった人々によって漢詩が伝えられるまで、歌は、ただ「歌」であった。近江京では、大友皇子を中心に、漢詩を詠じる宴がさかんに開かれていた。詠じられた漢詩は、文字に記され、蔵に納められると聞いた郎女は、大和の歌を文字として残せぬかと思案した。歌とは、誦ずるものであつて記されるものではなかった。だが、口伝えでは、後の世に正しく遺すことはかなうまい。

郎女は、人づてに文字を巧みに操る男童を知った。石見の柿本より近江に遷り住んだ貧しい官人の子である。書庫より取り寄せた唐の書を見せると、すらすらと読んだ。歌の上手でもあつた。郎女は、人麻呂という男童を側近く召し、大和歌を、漢の文字で表すやり方を、考えさせていた。

「宴の終わりは、額田郎女の大和歌がふさわしい」

大友皇子は笑つた。

「大官どもも、そう言い合つている」

郎女は、恥らうように眼を臥せた。

「されど今日の宴にては」

大友皇子は、懐より木簡を取り出した。

「吾の漢詩をも、披瀝したい。構わぬか」

「諾」

郎女は微笑んで応えたが、傍らで人麻呂が、不服げに眉を擡めるのを、皇子は見逃さなかつた。

「男童よ、汝は諾さぬか」

「まずは、汝の漢詩を見せよ。郎女ほどに巧みな歌ならば、披瀝してもよい」

「人麻呂！」

郎女に袖を引かれた人麻呂に、皇子は高らかに笑つた。

「言うたな、男童よ。では、読め。汝の評を聞きたい」

差し出された木簡には、こう記されていた。

皇明光日月

帝徳載天地

三才並泰昌

万国表臣義

天皇の威光は日月のように輝き、その徳は天地に溢れている。天地人、ともに泰平に榮え、四方の国々は服属し、臣下の礼を尽くす。

「唐には文章経国という言葉あり」

木簡を見つめる額田郎女に、大友皇子は言つた。字を以て、皇徳の隆盛を言祝ぎ、民に知らしめる。詩を以て国に尽くすのが、唐の文人の務めである、と。

郎女は、ただ微笑んでいた。皇子の詩は、ひたすら天皇を称えるばかりで、彩りに乏しい。

歌は、天地の狭間にある様々なもの——日の輝き、風のざわめき、闇に浮かぶ星や月、生い茂る

草木、川の水音、空を飛ぶ鳥、地を這う獣虫、そして人の心を詠むことで、言の葉の裡なる呪の力を發揮せしめるもの。そう思えど、口には出さずにいると、

「この詩は、如何に詠むのか？」

覗き込んでいた人麻呂が問うた。皇子は応えた。

「唐の言葉で詠む」

「されど」

人麻呂は、首を傾げた。

「唐の言葉を解さぬ者には通じまい」

一瞬、大友皇子の眉が曇った。

「さらに」

人麻呂は続けた。

「この漢詩には、景色がない」

「景色？」

「景色に託して思いを陳ぶるが、大和歌」

「言うたな、男童よ」

漢詩にも、景色を詠んだものはあるぞ。大友皇子は笑ったが、さきほどの闊達さはもうない。

郎女は、再び人麻呂の袖を引いて制したが、男童は食い入るように木簡を見詰め、気づかない。

「何をしている」

大友皇子が問うと、人麻呂は応えた。

「大和言葉で歌えぬかと、思案している」

「漢詩を大和言葉で？」

「然り、仕様のあるはず……」

しばし見つめていた人麻呂は、不意に大声を上げた。

「郎女！」

「如何した？」

「文字の順に読もうとするから、読めぬ。大和の言葉に合わせ、字を逆さにして読めばよい！」  
そして、高らかに歌い上げはじめた。

皇明、日月と光り

帝徳、天地に載つ

三才、並びに泰昌

万国、臣義を表す

「載天地を、天地載と返すのか……」

郎女は感嘆した。大友皇子は頷きつつ言った。

「よき智慧だが、漢詩には平仄なる決まりがある。字の並びを変えれば、平仄に合わなくなる」

「大和言葉の平仄には合う」

平仄など知っている、そう言たげな面差して人麻呂は応え、

「郎女！」

と、まとも高ぶった面持ちで叫んだ。

「さきほどの、野守はみずや。こう書けば如何」

人麻呂は石盤にこう書き付けた。

野守者不見哉

「見不ではなく、不見、なのか」

「返りて読むようにすれば、大和言葉を解さぬ唐人も、読める」

そう言ったきり人麻呂は、石盤に鼻先をつけるようにして、猛然と字を書きつらねはじめた。きみがそでふるは……君之袖……ふるは……布留……。

「皇子よ」

郎女は坐して額を地につけた。

「幾度もいくたびの非礼、赦したまえ。この男童、遠く石見の地より近江に来たばかりにて、礼を知らぬ。重ねて、赦したまえ」

「諾」

皇子は立ち上がった。

「この男童には学ぶことが多い。同じ詩歌でも、国によりて根となるものが異なるのだな」

「大和には」

郎女は臥したまま言った。

「大和の風あるが故に」

「日本」

どこか冷ややかに大友皇子は言い、郎女は思わず貌を上げた。

「日本の風は、面白い。唐や百済にはない習わしも多い」

存外に穏やかな面差しに、郎女は安堵しつつ問うた。

「どのような習わしが？」

「唐や百済には、二夫にまみえず、との言あり」

一瞬、大友皇子の眼が光った。額田郎女は微笑みを消し、口を噤んだ。

かつて、大海人皇子の妃でありながら、大友皇子の父なる豊璋王子と寝屋をともにしたことを、知っているのか。

肌身に粟あわが立った。

やがて大友皇子は軽く拝礼して去った。

「人麻呂」

勝ち誇ったように去ってゆく皇子の後ろ姿を見つめながら、郎女は男童を呼んだ。

「反かえしうた歌が出来たぞ」

貌をあげた人麻呂に、郎女は歌ってきかせた。

むらさきのはへる妹を

憎くあらば

人妻ゆえに、われ恋めやも

紫草のように艶やかな汝を憎く思うのであれば、人妻である汝を、吾が恋するはずもなし。

「むらさきのおえるいもを……むらさきの……。あかねさす、が茜草指ならば……紫草能……か」

人麻呂は、しきりに口のなかで繰り返しつつ、石盤に向かった。郎女は、まっすぐに空を見つめつつ、胸の裡で呟いた。

皇子よ……。

たとえ二夫にまみえようと、それが唐や百済の人倫の道に背こうとも、そして、皇子の心を悩ましめたとしても、吾は吾。

伊勢の頃に皇子と睦んだ、吾。

「皇子は常に」

俯いた頬を、すつと風が撫でたようだった。紅葉の幹に背をもたせかけ、独り物思いに耽っていた大海人皇子が貌を上げると、倭媛皇后が数人の女孀を随れて立っていた。

「さように、独りでおわすのを好みたもうや？」

皇子は立ち上がり、皇后への拝礼を繕った。

「否」

苦笑いしつつ、大海人皇子は応えた。

「酒を過ぎして、酔いを覚ましていたのみにて……」

「しばし物語りをして、構わぬか」

皇后は、皇子の傍らに、ふわりと裳裾もすそを広げて坐した。

「なかなか、皇子とも逢えぬ故。皇子も坐したまえ」

皇子は頷き、皇后に向かい合って坐した。女孀どもは、拝礼して、やや離れて足元の草を摘んだり、笑いさざめいている。

「この頃は、寝殿よりの出入りもままならず……」

皇后は、眠たげに垂れた眼で空を見上げつつ、言った。

「故に、吾から皇子に物語せんと誘いざなった次第」

黙して微笑む皇子に、皇后は、愛らしく相好を崩した。

「かつて、讚良と睦みあった乙女の頃、木幡と呼ばれた折が、懐かしく思い出される」

讚良の名に、皇子は、微笑が強張るのを覚えた。

もしや……。皇子は離れて語らいに興じる女孀どもをひそかに見やった。

たとえ皇后が、ひたすら讚良の思い出を語り合いたくだけでも、女孀どもの中には、安見娘の配下の土蜘蛛も混じっている。心許すわけにはいかない。

「飛鳥の山や野で、皇子に教わりつつ、讚良と鞠まりを蹴りおうて遊んだこともあった」

あの頃……。そう、もはや十一年も昔。養いの母おやであった額田郎女が宝大王の宮に歌人として召されていた頃、葛城皇子の皇女ながら、逆賊とされた蘇我石川麻呂の孫ゆえに、人目を憚って

育んでいた讃良は、やはり逆賊として討たれた古人皇子の皇女であった木幡を誘い、睦んでいた。讃良にせがまれ、大海人皇子が二人に蹴鞠を教えた事もあった。

「吾と讃良が、有馬皇子の兵に捕らわれた折も、皇子の尽力にて、救われた」  
大海人皇子は居住まいを正し、言った。

「吾は何も……」

そのまま言葉は尽きた。

あれは……、香具山で、木幡を姦そうとした有馬皇子の弟、多治比皇子を、讃良が殺し、木幡ともども拉致われた。有馬皇子は、讃良の身と引き換えに、大海人皇子を謀叛に加わらせようとした。有馬皇子をして謀叛を起こさせ、これを鎮める事によって政事の中枢に復帰しようとした葛城皇子は、讃良と木幡を己が手元に置くことを、有馬皇子に認めさせ、捕らわれていた讃良と木幡は放たれた。

すなわち、大海人皇子は、何もしていない。何もできなかった。

「皇子は、知りたもうや」

苦い思いが蘇った皇子の心中を知ってか知らずしてか、皇后は、懐かしげな笑みを湛えたまま、言った。

「かつて讃良は言った。いずれ讃良は大王となり、吾に、飛鳥でいちばん大きな宮をたまうと」

皇子は、ひたすら、皇后の言葉を待った。

ただ、睦みあつた折の事を懐かしんでいるのか、それとも……。

「その宮に庭を造り、池を穿ち、船を浮かべて共に遊ぼうとも言った。その讃良は、いづくに去

つたか……」

「皇后」

長い睫をしばたたかせ、口を噤んだ皇后に、大海人皇子は言った。

「讃良は、力を尽くして、探させている」

皇后は、悲しげな笑みを浮かべ、手を合わせて頭を垂れた。

「讃良との事を……」

皇后は、面差しを変えぬまま言った。

「忌憚なく語り合えるのは、皇子のみ。今日は、心が晴れた」

曇りのない微笑みに、皇子は俯くしかなかった。

「いま一つ、語ってもよいか？」

問われてうなづく皇子に、皇后は遠くを見つめるような面差しで語り始めた。

「かつて、宝大王は、吾等二人を前に、戯言めいて言われた。讃良も吾も、いずれは大王となるであろう、と」

そう言う皇后の意をはかりかね、皇子は黙っていた。皇后は続けた。

「そして、こうも言いたもうた。大王のつとめは、策を巡らすばかりにあらず、策や謀ばかりでは、官も民も随わぬ。如何に随わせるかを知りたければ……」

わずかに眼差しを臥せつつ、皇后は言った。

「額田郎女にこそ聞け、と」

皇后は貌を上げた。まっすぐな眼差しが、皇子を射抜くように見つめた。

「何故に」

黙し続ける皇子に、皇后は重ねて問うた。

「皇子は、郎女と睦もうとしたまわぬのか？」

「郎女は、かつては吾が妃」

皇子は、やつと口を開いた。

「されど、ここ数年は、さほども交わらず……」

「それ故、近江に来たまいても、十市皇女に会いたまわぬのか？」

口振りは柔らかだったが、瞬きもせずこちらを見つめる眼差しに、皇子はたじろいだ。

「十市皇女は、堅く門を閉ざし、人に会うも避けていると聞く故に」

「皇子は知りたまわぬのか」

皇后は、廻りに眼を配り、声を潜めた。

「十市皇女は、懐妊しておわす」

「皇女が？」

皇子は驚いた。大友皇子の妃である十市皇女の懐妊となれば、公にされてもおおかしくはない。

しかし、そのような噂さえ、皇子の耳には届いていない。

「この秋にもお生まれ遊ばすはずなれど、公にならぬは……」

皇后は、眉を曇らせて呟くように言った。

「皇女が孕はらみたまうたのは、皇女は近江にあれど、大友皇子は長く筑紫に留まりたまひし時。故に……」

それきり、口を噤んだ。すなわち、腹の子の父は、大友皇子ではない……。

大海人皇子は言葉を失った。天皇の皇子の妃が、他の男の子を懐妊する。あつてよいことではない。

殊に、王都が近江に遷つてより、皇族の妃が、夫せ以外の男と接することは、厳しく戒められてきた。その禁を、大友皇子の妃が破つたとなれば、大罪である。

「大友皇子は、ご不快にて、皇女に会おうともされず、いまは中臣が一族の耳みもの面と刀と自じなる妻をのみ寵愛されたまう。ただ、天皇には、いたく皇女を哀れまれ、この度の懐妊を公になしたまわなかつた次第」

皇后の眼差しが潤みを帯びてきた。

「皇子よ。いま、十市皇女は、近江京の外れに建てられた仮宮に籠められ、誰とも会えぬ態。皇子ならば、皇女の父故に、会うことを赦さぬわけにもゆくまい。是非に、皇女に会いたまえ。会えば、皇女の心も慰められよう」

膝を進める皇后に、皇子は何も応えられなかつた。

九年前、阿倍比羅夫の水軍みずいぐさに伴つて額田郎女と十市皇女が蝦夷えぞに赴いてより、すべては変わった。郎女は豊璋王子、すなわち今上天皇と情を交わし、十市皇女は蝦夷の者に姦され、人を遠ざけるようになった。

筑紫にあつた天皇が近江に入り、十市皇女は大友皇子の妃として、そして額田郎女は王宮に仕える歌人として、大津に住まいしている。大海人皇子は、天皇より、近江で大官の市に就くよう勧められたが、あえて固持し、飛鳥留守司として留まつた。以来、額田郎女と貌を合わせること

すら絶えていた。

大海人皇子は多くの子を儲けていた。十五歳になる高市皇子、八歳の大伯皇女、六歳の大津皇子、七歳の草壁皇子……。

額田郎女と十市皇女が去つてより、皇子はさらに多くの妃を求め、子を産ませた。もつとも愛でた妃である額田郎女と娘である十市皇女に去られた寂しさを埋めるように。

「もし、皇子が、十市皇女に会いたいとあらば」

黙したままの皇子に、皇后が口を開いた。

「吾が、そのように皇女に伝えてもよい」

「皇后は……」

皇子は問うた。

「十市皇女と親しく？」

「吾は……」

皇后は微笑んだ。

「無理強いに姦されかけた身。皇女の心は、些かではあつても、分かる」

何故、皇后は知っているのか。十市皇女が姦されたことを……。問う前に、皇后が言った。

「今日の御狩に誘うため、皇女の宮を訪うた時、吾にのみ、そのことを告げた」

皇后は、沈痛な面持ちで、十市皇女の言葉を告げた。

……あの時、総身に覚えた痛み、眼に焼き付いた日輪、あの男の醜い貌。九年もたった今だに忘れられず、時折、脳裡に蘇っては、吾を苦しめる。その苦しみから免れるため、多くの男とま

ぐわつた。まぐわう裡は、苦しみを忘れられる。されど、幾人の男とまぐわおうとも、すべてを忘れることはかなわない。

大友皇子は、吾の寝屋に來たことはない。皇子の父なる天皇が、吾が母なる額田郎女と情を交えたことを、皇子は知っている。百濟にては、女が一人の夫り他の男と交わることを穢れと見なす。吾は、穢れた女の娘。故に、吾に触れようとしぬ。

そう、吾は穢れた女の腹より生まれ、自らも穢れた女。

「まことに、そのようなことを皇女が……」

双の掌で己が膝を掴んで俯く大海人皇子を、皇后はしばし見つめ、やがて問うた。

「皇子は、如何、思いたもうや」

貌を上げた皇子に、皇后は続けた。

「天皇が、かつて百濟の王子であつた折り、額田郎女と交わつた事。さらに、十市皇女が、蝦夷の男に姦され、多くの男と情を重ねた事……。それ故、かの二人は穢れたものと、皇子は見なしたもうや？」

皇子は応えられなかった。

吾は戦つたぞ……。

かの瀬田川の船の上で、額田郎女が血を吐くように叩きつけた言葉が、蘇つた。

その通り……。そうは思いつつも、額田郎女や、まして十市皇女が、己ではない男と肌を重ねる様か思い浮かび、胸は狂おしく塞がれてしまふ。責められるべきは何もしてやれない我が身。それは分かっている。分かっている。心はどうにもならない。

「皇子の御苦しみは、分からぬでもないが……」  
口を噤みつづける皇子から、皇后は眼を逸らした。  
「吾が、かの香具山で、讚良に助けられることなく、あのまま多治比皇子に姦されていたらと思うと……」

皇后の唇が震えていた。

「皇子には分かるまい……組み敷かれた己が弱さ……抗いたくとも、抗えぬと知った時の悔しさ、恐ろしさ……」

「皇后よ」

皇子は、地に膝を突いて拝礼した。

「是非に、十市皇女に会いたいと、そう伝えたまえ」  
皇后の眼が見開き、口元が綻んだ。

御狩りは果て、人々はそれぞれの邸へと散った。

中臣金は、壮丁そうちやうどもの担ぐ輿こしに揺られつつ、伴部ともべを呼び寄せた。

「耳麻呂みみまろに、今宵、吾が邸を訪なえと告げよ」

伴部は頷き、輿の列から離れて去った。

あの女め……

輿が揺れる度に、ふぐりに残る痛みが、鈍く総身を貫く。中臣金は、脂汗を垂らしつつ、つぶやき続けた。

土蜘蛛の助けなど借りるものか、己独りの策で、乱を起こしてみせる。

その十数日の後。飛鳥に選った大海人皇子の許に、倭媛皇后の使者と名乗る女孀が訪なった。

「目立たぬ扮なりにて、梵釈寺ぼんしゃくじに参られよ」

との皇后の言葉を伝え、そうそうに去った。梵釈寺は、近江京より北に二里(約1キロメートル)。皇后が新しく建てさせた寺で、そこならば、人目を忍ぶこともできる。

大海人皇子は、舍人一人を連れ、暮夜、梵釈寺に入った。舍人を僧房に待たせ、独り金堂に入ったとき、仏前に坐す女が、こちらに背を向けていた。

「十市皇女なるか」

その声に振り向いた貌が、ほの暗い火影ほかげに照らされ、花が開いたかのように輝いた。背筋を伸ばしたまま、しなやかに踵を返したその動き。確かに、かの狂心の渠で見た、十市皇女であった。

「父なる皇子よ」

最後に見たのは十一歳のとき。それから十年の歳月が流れていた。十市皇女はすでに二十一歳。懐妊のため、やや面差しが衰れ、吹き出物が赤く点々としていたが、思いの他、落ち着きを見せていた。

「皇女よ」

大海人皇子は、舞い納めたときのように、すつと膝をそろえて面前に坐した皇女の、誇らしげに膨んだ腹を見やって問うた。

「つつがなきや」



「幸い、悪阻も軽く」

皇女は、腹に右の掌を当てて応えた。

「この頃は、吾が腹の裡にて暴れ、蹴ることもあり」

「さらば……」

皇子は膝を進めた。

「汝が子、触れてもよいか」

十市皇女は微笑を消し、見開かれた眼から涙が溢れ出した。袖で目尻を拭いしつつ、皇女は頷いた。

かつて……。皇子は思った。額田郎女が、ほかならぬ十市皇女を孕んだ折も、幾度も、このようにその腹に触れた。

「父なる皇子よ」

声を震わせ、皇女は問うた。

「不義の子を孕んだ吾を、赦したもうや」

「不義の子ではない」

皇子は、まっすぐに皇女を見詰め、言った。

「吾が娘である汝が子。吾が孫である」

皇女はしばし咽び泣き、やがて呟いた。

「この子の父が誰か、問いたまわれぬのか？」  
首を振り、皇子は応えた。

「汝が語りたければ、語れ。語りたくなければ、吾は問わぬ」

しばし俯き、皇女は応えた。

「語りたいことは……」

そして貌を上げた。

「母なる人のこと」

「額田郎女のことを？」

「然り」

赤く泣き腫らした眼の奥に、憎しみと蔑みを見てとり、皇子は面差しを引き締めて問うた。

「おおよそは、皇后より聞いた。汝は、母なる人を、未だ赦せぬか？」

「赦せぬ」

「吾とは別の……男とまぐおうた故にか？」

皇女は首を振り、言った。

「かつて、それ故に母を憎んだ。一度は赦した。されど……」

しばし口を噤み、皇女は語り始めた。

……七年前、宝大王に率いられた水軍が難波から熟田津に向かったとき、十市皇女は、讚良と木幡と同じ船に乗せられた。筑紫の朝倉に到って後も、讚良と木幡は、しきりに皇女を野遊びに誘った。共に遊ぶうちに、皇女の心は次第に晴れ、貌に笑みすら浮かぶようになった。

やがて、その遊びに豊璋王子、すなわち今上天皇が加わった。皇女は、何故に母なる額田郎女が、豊璋王子と情を交わしたのか、解した。豊璋王子は、どこか、大海人皇子に似ていた。あ

る時、豊璋王子から、皇女が蝦夷の地で姦されたとき、郎女が如何に嘆き苦しんだかを聞いた。母を赦そう。そう思うようになった矢先、宝大王が崩御し、讚良がいづくかへ消えた。葛城皇子の詔として、木幡と十市皇女は、磐瀬宮に遷され、仮宮に籠められた。朝倉の鬼の崇りを避けるためとされた。

それから三年、三韓で大和の水軍は敗れ、葛城皇子は縊死し、豊璋王子が天皇として高御座に昇った。額田郎女が、十市皇女を訪ったのは、その後であった。

久方ぶりに見る母なる額田郎女の面差しは強張っていた。天皇が……。母は言った。大友皇子の妃に、汝を望んでいる。

赦しを陳べようと母を待っていた皇女は、その言葉に心を凍らせた。

すでに、木幡が倭媛皇后として、天皇に迎えられていた。大和を日本と名を改め、大王家と百濟王家を解け合わせようとする天皇の意は、皇女にも判っていた。だが、眼を逸らして天皇の意を伝える母を、皇女は蔑み、やがて憎んだ。

諾……。そう応えたとき、母は面差しを緩め、しかし、強張ったままの皇女の貌に、再び眼を逸らした。

皇女は、その意を決した。大友皇子の妃になる。妃となっても、決して大友皇子には随うまい……。

「それ故に、名も知らぬ賤が男を吾が寢屋に誘うたのではない」

冷やかな笑みすら浮かべ、皇女は静かに語った。

「妃となり、大友皇子の宮に上がったその夜、皇子は縄を携えて現れた。吾を縛り、臥せに転

がし、吾を姦そうとした。吾は抗った。皇子のふぐりを蹴った」

笑みはそのままに、皇女の腕が細かく震え始めた。

「皇子はしばし呻き、立つこともかなわず、やがて去った。次の夜、皇子は百濟より来立った者を一人、随（えて表れ、吾を押さえつけ、手足を縛った。自らは坐して酒を飲みつつ、百濟人に吾を姦させた」

皇女は口を嚙み、頬を震わせ、息遣いも荒く、双の手で己が膝を掴んでいたが、やがて呟くように言った。

「それより、皇子が吾を訪なうことは絶えた。吾は、皇子に受けた辱めを忘れるために、多くの男を寢屋に引き入れた」

不意に、皇女は声を荒げた。

「皇子は厭うている。二夫まみえるを恥とせぬ大和の風を厭い、故に父なる皇子と天皇とを一度は夫とした母なる人を厭い、多くの男と情を交わした吾を厭う。そして誰よりも、父なる皇子を厭う。否、大和のすべてを厭う」

薄暗い金堂に悲痛な声が響き渡り、やがて皇女は、しばし黙した。やがて眼から涙が一筋、顎まで垂れて、床に落ちた。

「母なる人が……何故に吾を、大友皇子の妃となすことを諾したか、分からぬでもない。百濟王家と大和の大王家をつとなし、日本を平らかに治めるための策。されど……」

皇女は膝を進め、右手を伸ばし、大海人皇子の腕を掴み、貌を臥せ、肩を震わせた。涙が次々と、床に染みを作った。

「……されど、母を赦すことはできぬ」

声を忍ばせて咽び泣いていた皇女は、不意に床に叩頭し、叫んだ。

「妃ながら、不義の子を孕んだ吾が、誅されもせず生きながらえているのは、倭媛皇后の情け故。皇后が天皇を説いた故。されど、天皇は病がち。やがて、大友皇子が高御座に昇れば……」

皇女は、大海人皇子の膝に額をつけて言った。

「父なる皇子よ、せめて、腹の子のみをも、守らせたまえ！」

黙し続けた皇子は、ただ一言を發した。

「汝を守る。汝が子も守る」

守れるか？

梵釈寺を出でた大海人皇子は、胸の裡で己に問い続けた。

吾に、十市皇女を守れるか？

如何に守る？

……敵の情を知らざる者は、不仁の至りなり。人の將に非ざるなり。

かつて讀良皇女が口にした「孫子」の一節が脳裡に浮かんた。

「置始比等と宇佐伎を呼べ」

飛鳥の河辺宮に還った皇子は、老いた舍人とその子を寢屋に召した。

「汝等は近江へ行け」

近江へ？ 首を傾げる父子に、皇子は言った。

「吾が命あるまで、かの地に留まり、天皇や大友皇子、蘇我、中臣、巨勢ら大官どもの動きを、事細かに知らせよ。あるいは、大官どもの身内に、吾に助力する者がいるや否やを探れ。探つていなければ、財たからを与えて吾が味方となせ。財は幾らでも与えよう」

「諾」

比等はまず頷き、それから問うた。

「されど、何故に」

皇子は声を低めて応えた。

「今上の天皇のつつがなきうちは、世も鎮まっていよう。されど、天皇が崩御したまえば、大友皇子は必ず動く。軍を興しても、吾を排しようとする。さらばその時こそ……」

息を呑む舍人どもに、皇子は静かに告げた。

「吾は動く」

その動く時に備えるため、近江の内実は悉く知っておきたい。

「動く……とは」

年若な置始宇佐伎は、頬を赤く上気させて問うた。

「大友皇子を討ち……」

皇子は応えた。

「吾が、日本を統べる」

「皇子の舍人として仕え奉ってより幾十年……」

眼を見張った宇佐伎の傍らで、比等は幾度も頷いた。

「そう言たまう日を、待っていた」

二人は拝礼して去った。

言い終え、不思議と高ぶりはなく、心は平らかに静まっていた。大海人皇子は、胸の裡で練り返し、呟いた。

十市皇女よ……。

吾は汝を守る。汝を守るため、否、吾が愛で、吾が慈しみ、吾と睦み、吾を慕う者すべてのため、この国を統べる。